

京都市 明德児童館

訪問調査日 平成 30 年 11 月 21 日(水)

ヒアリング対象者 館長 西尾 久美

訪問調査者 岩田、野澤、中村

I. 概要

1. 児童館等の概要について

(1) 施設規模 小型児童館

(2) 運営組織 社会福祉法人 京都サービス協会

(3) 開館年月 2010 年（平成 22 年）4 月 1 日

(4) 職員体制

館長、児童厚生員 4 名（児童館主担当は 1 名）、
臨時職員数名



(5) 年間運営費 約 4,600 万円

(6) 年間利用者数と、その内訳（乳幼児・保護者、小学生、中学生、高校生、その他）

平成 29 年度

児童館合計 12,421 人（乳幼児 4,581、大人 4,230、小学 1～3 年生 750、小学 4～6 年生
1,761、中高生 351、その他ボランティア 748）

**学童総出席児童数 26,015 人

(7) 年間活動計画・報告等

平成 30 年度年間活動方針

- ・様々な遊び活動や文化活動を通して、子どもの主体性、社会性、創造性を養い、「生きる力」を育て、子どもの自立を支援する。
- ・様々な活動や、保護者の主体的活動の支援を通し、子どもがより健やかに育つよう、子育て家庭を支援する。
- ・障害のある子どももいない子どもも共に活動する統合育成を推し進め、子どもの生活にローマライゼーションの理念を具体的に定着させる。
- ・異年齢・異世代交流の中で、子どもや子育て家庭が育ちあう環境をつくりだす。
- ・世代間交流を通して、次世代育成の循環構造（世代間扶助）を地域社会に築いていく。

子ども育成機能、子育て家庭支援機能、地域福祉促進機能の3観点から児童館活動を組み立てている。

(8) 自治体における児童館の位置づけ（児童館設置数、子ども育成計画等の内容）

児童館は京都市全体で130館。

＜京都市の児童館活動の理念＞

① 京都市児童館活動指針

この指針においては、児童館活動の基本目標を「地域におけるすべての子どもと家庭のウェルビーイングの促進」に据え、京都市における今日的な児童館の活動のあり方を定めている。

② 児童館活動の基本目標

「子どもの最善の利益の追求」という児童の権利に関する条約の理念と、子どもの健全育成・子育て支援の社会的要請を踏まえて、「地域におけるすべての子どもと家庭のウェルビーイングの促進」を活動の基本目標に据えている。

具体的には、子どもの自立支援をめざす子どもの健やかな育ちを援助する活動、子育ての社会連帯をめざす子どもと子育て家庭を支援する活動、共生のまちづくりをめざす子どもと子育て家庭を支える地域社会を創造する活動の3つの分野において、活動を展開していく。

③ 児童館活動の推進視点

京都市では、「京都やんちゃフェスタ」の基本テーマである3つの基本理念すなわち、遊びの復権、子どもの人権の尊重、ノーマライゼーションの推進という3点を、児童館活動の推進視点として掲げて事業展開を図っていく。

2. 周辺環境について

(1) 地域の状況（産業、地域特性、交通事情など）

京都市には児童館が130館ある。運営は市内の複数の社会福祉法人等に委託されているが、公益社団法人京都市児童館学童連盟が一貫して職員研修等のサポートを行っている。また、1999年の策定以来3度の改訂を経た『京都市児童館活動指針』も持っており、京都市の児童館は全体として一定の活動レベルは担保されていると言える。なお、130館のうち129館は放課後児童クラブを一元化して運営している。

明德児童館は、周辺に精神科の病院が2つ、総合病院が1つ、そして、多数の高齢者福祉施設がある地域にある。そのため、保護者にはそうした病院や施設に関わっている方も多い。近年、交通の便も良くなり宅地化が進行し、人口も増えている。京都市は基本1中学校区に1つの児童館を設置しているが、明德児童館のある岩倉地域は3つの小学校各々に1

つの児童館がある。

母胎となる法人が高齢者福祉をメインにしていることもあり、同法人の他の児童館の実績から学びつつ、高齢者施設との連携事業に意識して取り組んでいる。

(2) 児童館と地域住民や地域組織とのかかわり

地域の団体は開館の時から協力的で、3年目には運営協力会議が組織化された。年4回会議を持ち、夏休みの朝の学習時間のサポートなど、具体的にボランティアとして力を貸してくれている方もたくさんいる。困ったときに手を差し延べてくださる方が多い。

II. 訪問調査の結果

1. 日常的な利用者の過ごし方や職員のかかわりについて

(1) 乳幼児とその保護者の過ごし方と職員のかかわり

① 乳幼児とその保護者は、普段児童館でどのように過ごしていますか？

乳幼児クラブや事業参加を目的とした目的利用と、自由来館のパターンがある。

② 乳幼児と保護者にかかわる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか。

あるいは、どのような工夫をしていますか。

(ア) 心地よく過ごしてもらうために意識して行っていることは何ですか？

基本的に誰でもウェルカムで精神で門戸を開いており、初めての来館の方には丁寧に案内するようにしている。また、プログラム内容のクオリティを上げることより、保護者同士が仲良くなれることの方を大事にしている。常連が幅をきかせていて新しい来館者が入りづらいということがないように常に配慮している。

(イ) 主体的にかかわってもらうために意識して行っていることは何ですか？

乳幼児クラブでは母親たちには班を作ってその中で活動してもらっている。また、ちょっとした手遊びや、絵本の読み聞かせ、お誕生会の名前呼び等、簡単な当番もお願いしている。

(ウ) 保護者同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

母親同士の（既存の仲良しグループではない）新たな関係作りのためには、協力して何かをしてもらうことはとても有効である。そのため、当番活動を取り入れているのだが、今時の母親たちはそれを負担と考える。母親たちが負担に思わず取り組める程度に抑えておくことも重要である。職員が話し合いながらその加減を決めている。



未就学児向け親子プログラムでの読み聞かせ

(エ) 施設や職員との関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

立ち話でも、子どもと遊んでいるときにも、ポロっと子育ての辛いことや心配事等を気軽に相談できる雰囲気作りを心掛けている。親御さん同士が相談し合えるようにつなげることも意識している。

(2) 子どもたち（小学生や中・高校生）の過ごし方と職員のかかわり

① 子どもたち（小学生や中・高校生）は普段、児童館でどのように過ごしていますか？

放課後児童クラブが多数であるため、そもそも自由来館で来る子どもは少ないが、友達がいるから来館する、卓球をしに来るなど目的利用も多い。毎日来館する子もいる。中学生の目的利用は少ない。

② 子どもたちとかかわる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか。あるいは、どのような工夫をしていますか。

(ア) 居場所づくりのために意識して行っていることは何ですか？

小学生は大半が放課後児童クラブ登録児童なので、自由来館児童にもしっかり目を掛けて、彼らにとってもここが自分たちの居場所だと感じられるようにしっかりと声掛けするようにしている。

(イ) 主体性を育むために意識して行っていることは何ですか？

けんかやトラブルの際、職員が介入するタイミングについて、早く手を出しすぎないということを意識している。子どもたち同士がぶつかって、自分たちで解決する力をつけていくことを願っている。

独裁的に振る舞っている子と、それに追随している子たちがいた場合、よくないからと「独裁者」の子を職員が注意してしまうと、追随している子たちが反撃する力を養うチ

チャンスを奪ってしまうことになる。子どもたちの自治能力が育たない。職員がむやみに介入して、子どもたちの育っていくエネルギーを削いだらいけないと考えている。

自由遊びだから、子ども同士でルールが違うのは当たり前である。その中で自発的にルール作りが行われるように職員がサポートしていく。

(ウ) 子どもたち同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

基本的に誰が入っても一緒に遊べるような雰囲気作りをしている。子どもたち同士ではなかなか続かないこともあるので、職員と一緒に遊んで、他の子も入ってこられるようにつなぐということはよくやっている。

さまざまな活動の「振り返りの時間」で、お互いを認め合えるようにしている。

クリスマス会とかお化け屋敷とかは「実行委員会」形式で何回も話し合ったり準備したりしていくが、子どもたちの集団に全てお任せにしまわないようにしている。前に経験がある子とか、特にやりたい思いが強い子が独裁的になってしまわないように、参加してきた子みんなが意見を言って、全体で納得しながら進んで行けるように見守っている。

(エ) 施設や職員との関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

さまざまな活動に、できるだけ大学生に参加してもらおうようにしている。子どもに近い立ち位置で、職員との間に入って、子どもたちの良いモデルとして全体をリードしてくれる。そういう青年が入ってくれることを期待して、いつも大学生に呼びかけて関わってもらおうようにしている。

2. 子どもや保護者の抱える課題と福祉的な対応について。子どもたちや保護者の様子について、気になることや対応していることはどのようなことですか？

「ふたごの広場」（多胎児の親子の会）を実施している。多胎児の母親から「『ふたごの広場』を実施している児童館なら、ふたご（育児）のことを考えてくれていると思うので来館しやすくなる」とご意見をいただいたこともあり、参加者が少なくても継続している。他にも地域の子育て家庭の抱える福祉課題を早期にキャッチして、児童館をきっかけに地域で温かく受け入れていけるように心掛けている。

3. 児童館における「遊びのプログラム」について

(1) プログラムの捉え方

職員は使わないが、大人が提供する素材・遊びを指してプログラムと館長は使用している。

(2) 「遊びのプログラム」の内容

① 児童館で実施している「遊びのプログラム」を教えてください。

児童館まつり、おばけやしき、防災演劇ワークショップ、卓球タイム、民舞クラブ、高齢者サポーター講座、クリスマス会、等

② それぞれの「遊びのプログラム」のねらいと実施内容を教えてください。

・児童館まつり

→Jr ボランティアが企画から主体的に取り組み、ミーティングを何回か行い、責任感を持ちながら、駄菓子屋さん、あそびコーナー等を当日子どもたちで運営している。自由来館の子も参画している。

・おばけやしき

→Jr ボランティアが企画から参加しているので、子どもたちの自己実現の場となっている。大学生ボランティアの参加もあるので、おばけやしき作りが異年齢交流の場になっている。

・防災演劇ワークショップ

→防災に対する意識を高めるために、高学年が防災をテーマにした劇を作っている。

・卓球タイム

→卓球に親しみながら、異年齢と関わる時間。技術的な向上を第1の目的には掲げていない。

・民舞クラブ

→発表の機会を節目とし、高学年が中心となり、何を踊るかも子どもたちが主体的に決めている。お互いを認め合い、支え合える仲間作りができるように。

・高齢者サポーター講座

→高齢福祉分野との協働で、子どもと保護者世代に認知症や老化についての理解と啓発をし、地域住民との交流をする。

・クリスマス会

→Jr ボランティアが企画から携わり、当日も運営する。

(3) 「遊びのプログラム」の各展開過程で大事にしていること

行事やイベント等で職員が提供するプログラムは、子どもたちの日常的な遊びがより豊かにおもしろくなるための投げかけであると捉えている。ドッジボール大会は出て勝つのが目的ではなくて、みんなで取り組むことによってボール遊びしなかった子がボール遊びの楽しさに気付いたり、仲間作りになったりということを狙っている。大会に向けて盛り上げるのではなくて、大会が終わってからその遊びが盛り上がる。行事やイベントは日常の遊びを集約したものではなく、日常の遊びを下で支えるもの。子どもたちは日常遊びとイベントを行きつ戻りつしながら育っていく。)

さまざまな取り組みを行う際、「一石二鳥」を意識的に狙う。地域の協力を得ることで、

子どもたちの活動も豊かになるし、そのことで、地域住民同士の交流も促進される。そうすると、地域の子育て環境が豊かになるし、子育て家庭にとってもプラスになる。

小学生と乳幼児親子の交流も、小学生は小さい子に関わることで優しさが引き出されるし、小さい子はお兄ちゃんお姉ちゃんに対する憧れの気持ちを抱くというように、子ども同士のいい関係がある。保護者にとっては育ちの先が見える。

① 「遊びのプログラム」を作成する際にどのような準備をし、どのようなことを大切にしますか。

放課後児童クラブ登録児童全員で取り組んでいるドッジボール、太鼓、認知症サポーター講座等は強制参加にせざるを得ないので、「やりたくない」って言っている子が「やったらおもしろかった」に変わるように、ものすごく考えて準備している。

子どもたちが自分で考えたり工夫したりして主体的に取り組めるように仕掛けていくと、それは子どもたちのおもしろい遊びになる。そもそも強制参加のものも、おもしろがってやれたら遊びになる。そういう風に仕掛けて、地域社会の課題に子どもたちが取り組むことができたなら、子どもの育ちにも地域福祉の促進にもなる。そう考えて、認知症サポーター講座とか、防災演劇ワークショップの取り組み等を行っている。

④ 子どもとの関りにおいて大事にしていること。「遊びのプログラム」を展開するすべての過程において、職員やボランティアが子どもとのかかわりにおいて大事にしていることは何ですか？

人と人との交流で遊びが伝承され、子どもが健やかに成長していくためにボランティアたちと協力していく。子どもが自発的におもしろがって、やりたくなってやるのが遊びであるということを意識する。

⑤ 「遊びのプログラム」の評価（効果の検証・分析）方法

① 「遊びのプログラム」は通常どのように評価していますか？

活動に参加した子どもたちが、自発的に、主体的に、おもしろがって、生き生きやっていたか。その活動が、子どもたちのそういう姿を生み出す仕掛けになったかどうかという視点で振り返って「評価」している。

また、別の行事や別の場面、予定外のことが起きたとき等の子どもたちの対応力（姿勢、意見、行動）に、「それまでの活動で経験したことが力になっているのだな」と振り返って実感することもある。

② その評価はどのように活用していますか？

次の計画を立てる際に振り返る。ただ、感性だけで仕事をしてきている部分が多いので、理論的枠づけを元に評価し、その評価を活用できるといいのだが…。

Ⅲ. 考察

大規模な放課後児童クラブを一元化して運営している児童館。児童数の割に施設は狭く、スタッフも潤沢にしているわけではない。施設環境としては必ずしも恵まれているわけではないが、小学校の一角にあるため校庭が使えるのが子どもたちにとっては救いである。このような環境で、あれだけの数の子どもたちを安全に、トラブルなく生活させるには、ルールの内在化が求められる。指導員は子どもたちのことをよく観察し、しっかりと関係を作りつつ、時折厳しさも覗かせる。程よい緊張感が全体に流れていたのが良かった。スムーズに館内の道具やおもちゃなどを利用できるよう、子どもたちが独自にルールを決めていて、それらのルールが館内に貼り出されている。ルールを決めるプロセスとして大人側が一方的に決めたものではなく、子どもたち自身が自分たちで合意して決めたルールなので、お互いがそのルールを尊重しよく守られているとのことであった。

放課後児童クラブの割合が多いと、児童館の看板を掲げている実態として児童クラブしかやってないところも多いが、ここは本来の児童館としての機能も発揮していた。午前中は乳幼児親子が集まっていたし、我々が伺ったときは夕方以降、館長が指導する「民舞クラブ」の活動があり、小学生から中高生までの子どもたちが熱心に練習をしていた。子どもの活動については、来館している子どものほとんどは児童クラブの子どもであるため、児童館事業であっても参加児童の大半が放課後児童クラブ登録児童であることが多い。希望した子どもたちが定期的に「エイサー」や「ねぶた踊り」などの伝統芸能を練習するなどのプログラム化した活動もあれば、友達同士などで自由に遊ぶ卓球やボードゲーム、一人で読書や積み木などで遊ぶこともできる。日常の過ごし方の中で、子どもが自ら組み立てて遊ぶことを、職員で徹底して意識されていることも分かった。子どもの遊びに付き合い、支える姿勢を職員が持っている。例えば、セパレートされている卓球台の真ん中に空間を作って、子どもたちが「ロング卓球」をしている際も、安全に配慮しながら、少し発展させた子どもの遊びに温かいまなざしを向けていたある職員の姿が印象的であった。

本来、子どもにとって遊びは計画性なく遊ぶものであり、計画が決まっているプログラムは日常遊びを補強するためのものであるという発想で日々実践を重ねているとのことである。日常を土台にプログラムを作成するという発想ではない、この児童館（館長）の着眼の仕方がおもしろいと感じた。それだけ日常の子どもたちの姿を大切にしているということの現れでもあるだろう。

遊びのプログラムの「評価」については、子どもたちが生き生きしていたか、子どもの生きる力につながっているか、職員の子どもの関わりがどうだったか、職員の工夫がどう生かされたか…、等という視点で振り返って判断しているという。その判断の基準については、単なる経験値ではなく、言語化され理論に基づいた評価軸が必要であると考えられる。

小学校の敷地内に立てられているので、放課後児童クラブの子どもたちは、車の往来する一般道を歩くことなく校舎から校庭を横切って、直接児童館に来館できる。校庭の利用

については、時間によって児童館、小学校、幼稚園の子どもたちに使い分けられている。当然、小学校の授業時間内は小学校の子どもたちの利用時間であるが、放課後は児童館や児童クラブの子どもが利用できるなどの棲み分けがされている。さらに校庭からは直接アクセスはできないが、岩倉図書館も児童館に隣接しているので、雨天時などで校庭が使うことができないとき、職員とともに子どもたちが児童館から図書館に移動するというような使い方も行われている。明德児童館はまるで商業施設のショッピングモールのように複数の施設が合築された、複合子ども施設群を形作っている。子ども関連施設を1か所に集中して建て、ここに来ればワンストップで子ども関係のニーズに応えられるような場所となっている。

館内にはそのほかにもさまざまなサインや工夫がなされ、子どもたちが児童館を利用しやすいように配慮がされている。例えば階段を降りて来る子と廊下を歩いている子がぶつからないように注意を促すサインが床に貼られてあったり、階段の踊り場に2階の部屋の利用状況を貼り出してあったり、運動場を利用するときには誰が館外で遊んでいるのかを自分で記録する用紙が置かれていたり等、子どもの自主性を尊重しながら上手に秩序を保つ仕組みを実践している。

法人内の児童館長同士で情報共有を密に行っている。その際に、理念面にも立ち返って話し合うことで、児童館が向いている方向性を見失わないようにしている。京都市は「京都市児童館活動指針」を打ち出し児童館運営に生かしているが、法人内でも児童館運営に対して理念を通底させようとしている。子どもとかかわるとき、プログラムを組み立てる際にも理念に立ち返ることで、活動の軸を安定させている印象である。

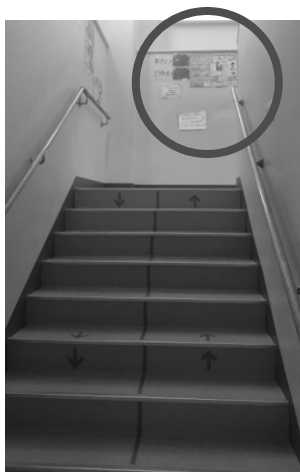


児童館に来た子どもたちが広い運動場を使えるのが魅力

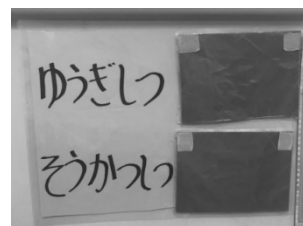
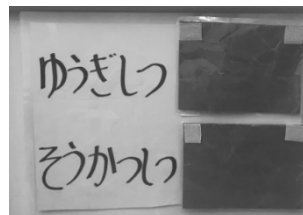
【子どもが使いやすい工夫】



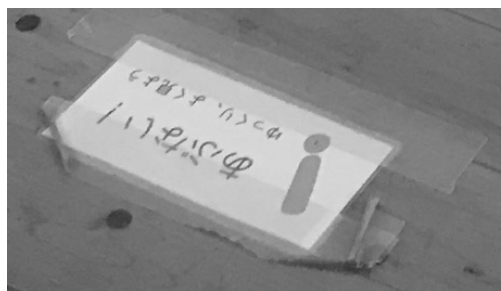
運動場を利用するときは、自主的に用紙に名前を書いてから遊び始める



踊り場に掲示されている2階の部屋の利用状況



(上)空室
(下)利用中



導線の交差する場所には点字ブロックとともに「あぶない」と書かれたサインが床に貼られている



神戸市 六甲道児童館

訪問調査日 平成 30 年 11 月 29 日(木)

ヒアリング対象者 館長 金坂 尚人

訪問調査者 安部、鈴木、中村

I. 概要

1. 児童館等の概要について

(1) 施設規模 小型児童館

(2) 運営組織 特定非営利活動法人 S-space

(3) 開館年月 昭和 49 年（1974 年）5 月 4 日

(4) 職員体制 15 名（常勤 3 名 放課後児童支援員 10 名 他）

(5) 年間運営費 38,500,000 円（平成 29 年度）

(6) 年間利用者数と、その内訳（乳幼児・保護者、小学生、中学生、高校生、その他）

平成 29 年度入館者数 開館日数 320 日 単位：人

合計：44,719（乳幼児 10,475、保護者 10,397、1～3 年生 2,733、4～6 年生 1,543、
学童利用児童 17,489、中・高校生 1,195、その他 887）

(7) 年間活動計画・報告等

① 児童館の運営方針

・特定非営利活動法人 S-space の運営目標

「知力・体力・時の運、それに表現・責任を！」

知力 知識だけを重要視するのではなく、知恵をいかに活用することができるか

体力 健康に生活でき、動かすことのできる部分を十分に使って遊べるか

時の運 その時その時に出会った出来事にどのように対応することができるか

表現 言葉・態度などで、いかにうまく他の人に自分の気持ちを伝えることができるようになるか

責任 自分が選択して行ったことに対して、いかに責任をとることができるか。また、取ろうとする気持ちが持てるようになるか。

この 5 つのことを中心に、こども・保護者・指導員・協力者等、児童館に関わるすべての人々が共に自分のペース（Self-pace）で過ごせる居場所（Space）になれることを目指し運営にあたる。

② 1年間の活動計画

【平成29年度】

児童健全育成事業（子ども育成事業・いきいき体験事業）

行事活動

●文化的行事・伝承遊び活動

独楽検定（月2回） けん玉検定（月2回） その他各種大会の実施

●月1の特別プログラムの実施

竹とんぼづくり、こいのぼりづくり、楽器にふれよう週間（さまざまな楽器を体験）、科学あそび週間、卓球週間（ピンポン大会）、リボンストラップづくり、どんぐりマーケット、旗源平大会、お茶会、紙飛行機づくり

●地域連携行事

・ビル主催行事 駅前夏祭り（型抜き）

・地域主催・区催行事等

ベビーキャラバン、赤い羽根共同募金、成徳祭り

・その他協力事業

交通安全教室、認知症講座、発明王になろう、全日本こま技選手権大会・同交流会

年長児童（中高生）の活動支援

中高生の居場所作り（週2回の夜間開放 17:30～19:00 年間89回）、ワークキャンプ、トライやる・ウィーク

高齢者とのふれあい交流 灘在宅福祉センター交流期間

児童館合同行事

こどもフェスタ、六甲ファミリー祭り、灘ふれあい秋祭り、灘子育てフェスタ

子育て家庭支援事業

放課後児童クラブ

重点項目

学校との連携を密にし、児童の育成支援を進める

個人記録・相談記録簿を作成、聞き取り内容や対応など今後の対応につなげる

在宅育児家庭支援事業

すこやかクラブ

2歳児（もも）、2歳児（すみれ）、3歳児（ゆり）

「夏休みすこやか」小学校長期休業中に勤労市民センターを借りて実施

「PAPA すこやか」祝日実施し父親の児童館デビュー・育児参画を促す

児童館キッズクラブ

すこやか ゆり組登録者対象 年度最終登録：8組 26回実施 述べ参加人数：385名

地域子育て支援拠点事業

実施期間 平成28年4月15日～29年3月21日 計110回実施

月	なかよしひろば 及び キッズクラブ (お弁当広場含む)	10:00～13:00
火	ふらっと [ノンプログラム] (お弁当広場含む)	10:00～15:00
	あかちゃんのおへや (ねんね・おすわり程度)	月1回程度実施
	あかちゃんふれあいタイム (0～12ヶ月)	月1～2回程度実施
金	なかよし・そよかぜひろば [プログラム有] (お弁当広場含む)	10:00～13:00

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	不詳	キッズ	大人	計
人数	1,379	1,347	733	229	96	37	116	177	3,411	7,525

小学校長期休暇中の乳幼児親子の居場所づくり

夏休み期間中の居場所開放 (区役所及び勤労市民センターにて実施)

夏休み居場所カレンダーの作成 (開催日及び地域内サークル情報のお知らせ)

プレパパママセミナー (新規事業)

産後の居場所についてのお話・灘区児童館 10館の説明・サークル説明・先輩ママからのお話・あかちゃんのお部屋プレ参加)

児童館子育て相談事業

幼児クラブ・学童保育クラブ・一般来館・各登録者等 随時児童館に来館又は電話での子育て相談を受けるとともに、相談記録簿を作成、聞き取り内容や対応等を記録に残し、今後の対応へとつなげていく

地域連携推進事業

どんぐりマーケット

対象：誰でも参加可能 共同研究：神戸松陰女子学院等（消費者教育）

児童館の遊びのマルシェで紹介されたことで、トライやる事業として日本各地で実施された。近隣保育園の遠足先としても定着、集まったどんぐりは沖縄県をはじめとした各地の子育て支援施設に郵送。



トンチンカンチン大工さん（自由木工）

月1回程度 11回実施 述べ参加人数：348名

ボランティア及び次世代の育成と交流

AM親子クラブ すこやかクラブ等の託児ボランティア、絵本の朗読ボランティア、
灘区社会福祉協議会ボランティア実習

クラブ活動 銭太鼓古典芸能の伝承

学童保育／一般来館 子供たちと関わっていただく一般の方

木工プログラムの補助 トンチンカンチン大工さんの参加ボランティア

子育てコミュニティ育成事業

ザリガニ釣り大会、Nゲージ&プラレールの日、流しソーメン大会、武田尾廃線ハイキング、防災ダンボールキャンプ、おかしのいえづくり

*全事業を終了後にアンケートを実施し、どのようなニーズがあるかの調査を行った

地域・他館連携行事

木工イベントゲストティーチャー、生活科講師、出張どんぐりマーケット等

広報活動及び調査

- ・ホームページ及び SNS を使った情報提供と活動報告
- ・来館者の傾向調べ（来館のきっかけと初来館日）

(8) 自治体における児童館の位置づけ（児童館設置数、子ども育成計画等の内容、他）

- ・灘区の児童館設置数：10 館
- ・少子化が進む日本において、文教地区ということもあり児童数が増加している地域。
- ・教育に熱心な家庭も多く、文化水準も高い。その一方で、転勤族が多く就学・就園前の子育て世帯は孤立しがちという背景がある。
- ・駅から直結した商業ビルの中にあるため、足を運びやすいというメリットがある。
- ・そのため、他の児童館に比べて来館者も多い。中でもベビーカーでの外出をする就園前の子どもたちとの移動は、徒歩圏内の児童館よりも楽なこともあり、交通機関を利用して来館する人も少なくない。（坂が多い地域の場合は特にその傾向がみられる）
- ・上記のような理由から、子育て世帯と地域をつなぐ、ハブのような存在を目指している。さまざまな地域から足を運ぶ来館者に対して、適切な情報を集め、情報収集の場としても活用してもらえる場となっていく。

2. 周辺環境について

(1) 地域の状況（産業、地域特性、交通事情など）

神戸市東の拠点として震災後震災復興都市として JR 六甲道駅近隣に都市機能を集約。灘五郷・西郷・東灘と共に文京地区（特に成徳・高羽・灘）。大阪神戸のベットタウンとして引っ越してくる移住者も多い。震災復興都市としてマンションが増加。人口や子どもたちも増えており現在、担当する小学校は全校 1,000 人弱、各学年 5 クラス。保育園も近年増加中。

(2) 児童館と地域住民や地域組織とのかかわり

指定管理を受けて 13 年が経過し、地域やビルの行事ごと等にも積極的に参加。一方では婦人会やビルの店舗会等でも高齢化となっており、子どもたちとともに地域の行事等においてさまざまな部分で頼られていることが多い。

(3) 子どもの育成環境

ある程度、生活水準は高い子が多く、習い事にたくさん通っている子どもたちも多い。その一方で転勤族等が多く、相談できる場所が少なくて悩んでいる保護者も少なくない。

(4) 地域の中で児童館以外に子どもたちが利用できる、施設・機関、活動等

- ・ユースステーション灘（中高生拠点・同一法人運営・同フロア）
- ・親子で元気に遊ぼう会（地域サークル）
- ・たつこの学童保育所（民設放課後児童クラブ・同一法人運営）
- ・成徳学童保育コーナー（児童館学童保育分室）
- ・スマイル（地域サークル）
- ・つどいの家（地域の居場所）
- ・ふらっと（子育てひろば・神戸大学）
- ・まうぼっくり（子育てひろば・神戸松蔭）
- ・他児童館 区内 9 館等

(5) その他、地域の特徴

- ・成徳小学校は神戸市内で残された唯一の学校公園であり、地域の方が積極的に子育て環境に関わり子どもたちを守ろうとする傾向がみられる。
- ・成徳小学校父親会パパイヤは 1995 年より活動。父親会活動の先駆的場所であった。
- ・「生活科」発祥の地でもあり、成徳小学校では生活と総合の全国大会が毎年行われる等地域と連携した取り組みにも力をいれている。
- ・六甲道児童館は JR 六甲駅前隣接の商業ビルの 4 階に位置し、同じフロアには勤労市民センター（市民のカルチャーセンター機能・貸館事業）がある。双方とも神戸市立ということもありトイレは共用となっているが、隣の施設を利用される高齢者が子どもを見に来たり、トイレを使用する際に一般の人と会話する等社会的なマナーを学ぶ上でもメリットが大きい。



II. 訪問調査の結果

1. 日常的な利用者の過ごし方や職員のかかわりについて

(1) 乳幼児とその保護者の過ごし方と職員のかかわり

① 乳幼児とその保護者は、普段児童館でどのように過ごしていますか？

こちらが企画したプログラムに参加したり、自由遊びのなかで保護者同士の関わりをとって情報交換やおしゃべりをして過ごしている。

② 乳幼児とその保護者にかかわる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか。あるいは、どのような工夫をしていますか。

(ア) 心地よく過ごしてもらうために意識して行っていることは何ですか？

保護者同士のつながりを持てるように言葉かけをしたり、話しやすい雰囲気づくりに努めている。放課後児童クラブを児童館内に実施しているデメリットとして、夏休み等長期休業中の居場所がなくなるという点が挙げられる。その打開のため、助成金を活用し、区役所等と連携しながら長期休業中の居場所作りを実施中。

地域の保育園等の情報を集約。地域の子育て支援の拠点として、来館者が必要としている場につなげることができるように子育てのハブ空港化を目指している。

(イ) 主体的にかかわってもらうために意識して行っていることは何ですか？

どんぐりマーケットの出品

保護者プログラムの推進（すこやかクラブ）

(ウ) 保護者同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

フリーな時と年齢をあえて限定した時間帯を作り、初めての人でも自分が該当し参加しやすいと思えるプログラム設定を行っている。

プログラムの中に情報交換をできる時間を設定したり、お昼ご飯の場所と時間を提供することで長時間児童館にて過ごしていただけるよう配慮しその中で保護者同士の関わりを密にとってもらいやすい環境構成を進める。

(エ) 施設や職員との関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

シンプルなことではあるが、なるべく職員と関わらず帰ることがないように言葉掛けをしている。毎週1回相談員の資格を持つ職員を配置。発達のことや育児のこと等を話しやすい雰囲気作りに努めている。

乳児室（うりぼうルーム）の設置。児童館の施設特性である異年齢の交流を阻害しないように、小学生も入室し関わることをあえて明記している。授乳スペース・調乳用ポット・おむつ交換台がある。



② 子どもたち（小学生や中・高校生）の過ごし方と職員のかかわり

① 子どもたち（小学生や中・高校生）は普段、児童館でどのように過ごしていますか？

館内では、スペースを区切っているが、開館時間中は自分で遊びや過ごし方を選択するように促し、自分で選択した行動に自分で責任を持てるように促している。

1つでもいいので自分が自信をもって取り組める好きな活動を見つけることができるようにたくさんの入り口を作る（きっかけ作り）を大切にしている（その扉から先に進むときにはサポート）。例）レゴ・廃材・独楽・ベーゴマ・検定

② 子どもたちとかかわる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか。あるいは、どのような工夫をしていますか。

（ア）居場所づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・戻ってこれる場所（帰りの際に困ったことがあれば戻っておいで）。
- ・いつでも帰ってこれる場所（中学生になっても、おとなになっても「ただいま」）。
- ・先生という呼称を強制しない→学校ではない場所・ただいまと行って帰ってこれる場所。

（イ）主体性を育むために意識して行っていることは何ですか？

- ・自分で選択する。
- ・大人が成功させない（うまくいかない体験もできる場所）。

（ウ）子どもたち同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・先輩が責任を持つ（独楽検定の色紐等）。
- ・上学年がルールづくり等に参画・説明（水鉄砲バトル）。

（エ）施設や職員との関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・懂れることができる背中を見せる。

- ・なぜ「〇〇してしまったの」ではなく「本当はどうしたかったの」。
- ・状況に応じてここで話を聞く。「さっきはあれでよかったの」。
- ・指導する位置ではなく、支援者であり伴走者。選択は本人が行えるようにする。



2. 子どもや保護者の抱える課題と福祉的な対応について

(1) 子どもたちや保護者の様子について、気になることや対応していることはどのようなことですか？

(2) それに対して児童館として取り組んだ事例があれば、具体的なエピソードをお話してください。

- (a)長期休業中の乳幼児の居場所の喪失（放課後児童クラブ実施児童館のデメリット）
→助成金を使った区役所と連携した居場所作り事業
- (b)隣接区の利用者
→他区の保健師との情報共有
- (c)放課後児童クラブの不健全化
→保護者との懇談（高学年の過ごし方）
- (d)大人の発達障害者の子育てに関するフォローの欠落
→区の保健師との情報共有と見守り
- (e)男性保護者の乳幼児施設の入り口作り
→男性や家族単位で参加しやすいプログラムアプローチ
- (f)「児童館」という名前の誤解
→プレママ・プレパパセミナーの実施（小型児童館としての地域の役割が課題）
- (g)本当に必要な人に情報が届かない
→ブログ・Facebook・紙媒体・ビルの掲示等多角的な広報、その人のアンテナに引っかかる取り組みを考える 例：写真講座

3. 児童館における「遊びのプログラム」について

(1) プログラムの捉え方

- ・多くの事業を「行事」と言っているが、一部の事業の中の内容を指して「プログラム」と呼んでいる。一般的な事業に関してプログラムと呼ぶことはない。

(2) 「遊びのプログラム」の内容

① 児童館で実施している「遊びのプログラム」を教えてください。

② それぞれの「遊びのプログラム」のねらいと実施内容を教えてください。

- ・どんぐりマーケット
内容：どんぐりと木の実を使ったお買い物ごっこプログラム。
ねらい：自然に遊びながら興味をもつ・消費者教育。
- ・防災段ボールキャンプ
内容：持ち物指定なしの段ボールでの1泊体験。
ねらい：自分で考える・うまくいかない体験・非常持ち出し袋の準備・家族の会話
- ・セルフタイマーで撮る『家族のうれしい顔』写真・六甲道家族写真館
内容：セルフタイマーで撮る家族写真及びビルでの写真展示会。
ねらい：お父さんの児童館第1歩応援。
- ・赤ちゃんハイハイレース
内容：ハイハイレース・カタカタレース
ねらい：普段の関わり（普通はなかなか認めてもらえない）を認める機会を作る。乳児期は大変だけど、家族でその大変さを楽しんでもらう風土作り。
- ・トンチンカンチン大工さん（自由木工プログラム）
内容：製作物を指定しない自由木工。
ねらい：都市部での日曜大工フォロー・男性の育児参画・シングル家庭における男性のロールモデルの形成。



・独楽検定

内容：月に1回のこままわり検定の実施・段位によって色紐授与。

ねらい：はじめてのことにチャレンジしてみる気もちづくり・自分でがんばったという証明と共に責任を持つ・遊び環境を子ども自身が守ることと担うこと。

・おかしのおいづくり

内容：自分で材料を選び、家族単位で好きな形のお菓子の家を作る。

ねらい：材料を買うところから家族で話し合いコミュニケーションを取りながら集める。当日は児童館側で基礎建材となるウエハースとコンクリートにあたる溶けたチョコレートだけ用意する。

・水鉄砲バトル

内容：各学年のポイントを決め、トータルポイントを子どもたちが決定し、サングラス等にポイを付けお互いに水鉄砲で打ち抜く。

ねらい：子どもの参画・異年齢での交流。

・プレママ・プレパパセミナー

内容：沐浴等技術的なことを伝えるのではなく、児童館運営等出産後に子育てを共に支える施設等応援団がたくさんいることを知ると共に、通常行っている児童館の赤ちゃんプログラムに体験参加してもらう。

ねらい：パパも一緒に来てもらうことにより、児童館の最初の一步のハードルを下げる。0～18歳までの児童館ではなく、-1～99歳の児童館を目指す。児童館という名称が持っている教育的な「児童」との乖離を早い段階で打開する。

③ 「遊びのプログラム」の各展開過程で大事にしていること

① 「遊びのプログラム」を作成する際にどのような準備をし、どのようなことを大切にしますか。

現在の子どもたち・保護者・家庭・地域が抱えている課題からスタートし、それを解決するためにどのような遊びを通じたアプローチを行えばいいかを考える。

② 「遊びのプログラム」の実施中、特に配慮しているのはどのようなことですか？

設定していたねらいだけでなく、意識していなかった点や、面白さが必ず出てくる。子どもならではの大人の想定から外れた工夫した点をどのように広げることができるか、やり始めた当初でしか見えない視点が必ずあるため、そこをキャッチすること。「できない」から考えるのではなく「どうやったらできるか」を考える。

④ 子どものとの関りにおいて大事にしていること

① 「遊びのプログラム」を展開するすべての過程において、職員やボランティアが子どものかかわりにおいて大事にしていることは何ですか？

- ・うまくいかないことを恐れない。あえての成功はさせない。あえての完成はさせない。
- ・「ほめる」ではなく「認める」。
- ・「しつけ」が丁寧になりすぎて「おしつけ」にならない。
- ・「平等」と「公平」の違いを意識し、必要などころには必要なフォローをいれる。

(5) 「遊びのプログラム」の評価（効果の検証・分析）方法

① 「遊びのプログラム」は通常どのように評価していますか？

- ・日案の作成及び反省（職員会議等での議題としてあげる等を含む）。
- ・年に1回行う来館者に関するアンケート（次年度も継続してほしい事業）。

② その評価はどのように活用していますか？

- ・次回開催の際の改善のポイント。

③ その評価は「遊びのプログラム」の改善に実際に役立っていますか？

- ・役に立ってはいるが、評価のほとんどが内部の意見となるため外部からの客観的な指摘が入りにくい。

④ その評価について改善すべき点があるとしたら、どのようなことですか？

- ・外部からの評価を得る機会を作る。→そのため昨年度のマルシェの事業は他の児童館での意見や評価を得ることができありがたかった。

4. 調査を通して気づいたこと

(1) 神戸市立六甲道児童館の周辺環境

人口152万人の政令指定都市神戸市より指定管理者としてNPO法人S-spaceが運営する児童館。神戸市の南北は山と海の狭間で勾配が強く、東西に長く市街地が続き移動はしやすいJR東海道・山陽本線の六甲道駅より徒歩1分の隣接ビル4階に設置されている。その立地条件の良さに加えて、周辺に8つのスーパーマーケットを擁しているため、市内広範から買物を兼ねた幼児連れ保護者の利用が数多いことが、特徴の一つである。児童館設置に当たって、立地環境は重要な条件であることが分かる。

地域性としては、防犯意識が高く、地域の大人たちが子どもたちに気軽に声を掛けられない現状がある。しかし、異年齢の交流は本来子育てにおいては大切なことの一つであるはず。ビル型の児童館であり、さまざまな人が行き来する場所であることから、地域のお年寄りが顔を出してくれたりすることで顔見知りになることができる。児童館という安心できる場所で顔見知りになることで、街で顔を合わせてもあいさつするような関係ができ、地域社会との接点が増えていく。

(2) 六甲道児童館ヒアリングから

- 金坂尚人館長（児童厚生員歴 10 年、NPO 法人 S-space 副理事長）の児童館運営理念
 - 自分は児童館がなくなることが理想だと思っている（地域住民も環境も子どもに配慮する）。地域全体が「みんなで子どもを育てるんだ」という意識を持ち、お互いを気にかける社会へと変化していけば、きっと児童館は必要なくなる。そんな日を目指して、地域と子どもたち、保護者との関わりを深めていきたい。
 - 仕事を辞めようと思ったことはあるが、それは子どもをミスリードしたとき。
 - うまくいかないことはある。それは失敗ではなくて、うまくいかない発見だと考えるようにしている。失敗の体験は、子どもたちが、こうしたうまくいかなかったという発見・体験ができる。
- 背景には、少子化に伴い、親子の関係が密になりすぎ、さまざまなことに手を差し伸べすぎている現状がある。保護者が「子育ての成功」を求められ、子どもたちに成功することばかりを求める現状もある。失敗したことがない子どもたちは、うまくいかない体験に直面するとパニックになったり、取り組みを放棄したりする。それを追い詰めることなく、成功するまで粘り強く取り組めるように声をかけ、時には待つことが大切であると感じている。小さな失敗を経験することは、小さな気づきや成長が生まれることと同義であるとも考えられる。
- 子どもへの向き合い方について、職員は子どもたちより年上ではあるが、指導する立場ではない。そのため、子どもから教えてもらうことがあっていい。自分ができないことがあれば「教えて」と子どもたちに教えるような大人でありたい。職員をしていて面白いことは、子どもが自分を超えていくこと。自分の発想や遊びを軽々と超えていく瞬間に立ち会えることが何よりも嬉しい。

(3) 遊びのプログラムについて

- 段ボールキャンプの発想は、震災の影響から防災対策（停電）を遊びに転化したこと。また、防災段ボールキャンプでは、事前事後が大事で当日はオマケという発想がある。たとえば、持ち物は自分で考えるというスタンス。先のこうするとうまくいかないという失敗体験の場になっている。事前事後の家族での話し合いを重視することで、子どもの変化や家族の変化を家庭で感じてもらうことを意識されているプログラムだと感じた。
- どんぐりマーケットでは、どんぐり貨幣をゲットするには、拾ってくる、バイトをする（工場長、銀行員、店員等）、生産者になって出品して集める必要がある。台風のと等とはとびっきりのどんぐりが落ちているが、どこで手に入れたかは子どもたちは教えてくれない。どんぐり通貨で社会の仕組みを遊びながら学んでいる。消費者教育、キャリア教育にもつながっている。
- 子どもは面白いと「またやってな」、イベントに成り下がる。どう自発力を高めるか。
- 父親の参画。母子家庭の子どもにとって、他の父親はロールモデルになり得る。

○人は独りでは生きられない。皆で協力することの大切さ、保護者にも理解してもらおう。

(4) 児童館が建物を持つ意味

○ただいま、お帰りという言える要素。拠点としての館。

○～～をしにいく場所。ポーとしていられる所。雨露もしのげる屋根付きの意味。

○縄跳びもすれば、将棋も指す。爺さん婆さんもくれば赤ちゃんも来る。室内で公的空間。

(5) 子どもたちのようすから

事務所の小さな応接セットで金坂館長を3人で囲みインタビュー。子どもたちが随時遊具を借りに来ては持って去る。館長に話しかける子どもや、私たちの様子を伺う子もいる。館長はその都度、子どもと向かい合い、子どもの問いに応え、仲間に入るかと誘う。「大人の用事だから外へ出なさい」とは言わない。その穏やかな対応が私たちにも大変心地良く、館長の言葉に裏はなく、子どもが真ん中という児童館の理念が体现されている姿を見た。また、放課後児童クラブの子どもだけでなく自由来館の子どもも多い中で、子どもたちが思い思いの過ごし方ができているのは、職員の関わり方にもヒントがあるのではないかと感じた。

(6) 全体を踏まえて

○法人の児童館運営理念がしっかりしており、軸がブレずに児童館実践を行えている印象。理念に常に立ち返ることが普段の実践から根付いている。

Ⅲ. 考察

日常における子どもや親との些細なやりとりをプログラム改善に反映していく道筋そのものを、評価として位置づける必要がある。

六甲道児童館のある六甲道駅付近は、阪神・淡路大震災（1995年）の被害が非常に大きかった地域の1つである。地域的背景を土台として、防災の取り組みをしようとしたが、子どもたちは集まってこなかった。そこで「遊びの中で学ぶ」にはどうすればよいかを考えてできたのが「防災段ボールキャンプ」である。このプログラムでは随所に「自分で考える」機会が設けられている。キャンプの持ち物はすべて自分で考えて決めるが、いざキャンプとなると使えないものや物が足りないことに子どもたちは気付いていく。自分の持ち物だけではうまく対処できないとき、みんなが持ってきたものを広げて何が使えるかを考えたり、うまくいかなかった体験が「次はこうしたら」という気付きにつながっていく。段ボールキャンプが終わって、帰宅した子どもたちは、何をしたのかを親と話す。このことを通して、子どもだけでなく親の防災に対する意識が変わったり、子どもを見るまなざしに変化することが多い。

当初の「子どもが、来ない」という状況は、ややもすればそのままプログラムが消滅す

る危険性もあったと思われる。ところが、「子どもが、来ない」という状況に対し、子どもの側から、すなわち「遊び」という視点で考えることでプログラムを改善していった例として注目できる。

「トンチンカンチン大工さん（自由木工プログラム）」は、製作物を指定しない自由木工であり、親子での参加やパパもしくはママのみでの参加も可能である。2018年12月で、通算125回目を数える「トンチンカンチン大工さん」のときだけボランティアに来てくれる地域のおじいちゃんもいるほど人気のプログラムである。のこぎりを使うときは必ず大人とやってください、とお願いしているが、比較的男性の参加者（パパやおじいちゃん）が多いため、子どもとパパ、子どもとおじいちゃんの組み合わせも多くみられ、男性の子育て参加の一環ともなっている。

職員は、ある母親からの「うちは母子家庭だから…」という一言を耳にしたことを受けて、一人親家庭の子どもには男性のロールモデルがないことに気付いたという。そこで、「トンチンカンチン大工さん」のなかで、男性たちに対しよその子どもであっても一緒にのこぎりを使ったり、木工を作るのを手伝ってもらえるよう促していった。遊びを通して、男性ロールモデルの不在という福祉課題にも対応しているのである。

これは、アンケートから出てきた変化ではない。日常の些細なやりとりを通じて、職員が気づき、それを遊びのプログラムの改善に活かした事例である。

両者の事例は、「現在の子どもたち・保護者・地域が抱えている課題からスタートし、それを解決するためにどのような遊びを通じたアプローチを行えばいいかを考える」という、遊びのプログラム作成の際の留意点を反映している。注目すべきはプログラムとして「うまくいかなかったこと」や職員にとって必ずしも都合がよくないつぶやき、子ども・親の態度や発言もあるということである。それらに直面したとき、自分の関わりはこれで良かったのかと不安になり、あるいは子どもや親を否定する支援者も少なくない。これに対し、六甲道児童館では、子どもや親の言動を一方向的に解釈して決めつけるのではなく、子どもの発想の豊かさやおもしろさ、親の背景に思いを馳せ、失敗を気づきにかえるという多面的な見方によって遊びの内容を深化させている。「子どもから教えてもらうことがあってもいい」という館長の言葉がその表れの一つであろう。

この背景にあると考えられるのが、現場での支援行為の寄りどころとしての理念の共有であろう。

運営団体である特定非営利活動法人 S-space の目標『知力・体力・時の運、それに表現、責任を!』は、共通理念として職員間で共有されている。より具体的には、現場での支援行為に迷ったとき、悩んだとき、立ち返るのは「子どものため」であり、保護者にとってではなく子どもにとってどうかを考えるようにしている。「子どもの声」や「子どもの様子」を第一に、職員会議等で気になったことを共有することも頻繁に行われている。

このような「子どもの声」や「子どものようす」から子どもの最善の利益を保障していくために職員が試行錯誤するプロセスは、児童館ガイドラインの体现であるといえる。こ

のプロセスそのものを評価する枠組みを構築する必要がある。



愛媛県久万高原町 NIKO NIKO 館

訪問調査日 平成 30 年 11 月 22 日(木)

ヒアリング対象者 愛媛県久万高原町 NIKO NIKO 館 前館長
久万こども園 園長 白川 真理
久万こども園 副園長 西田 紀子
NIKO NIKO 館 副館長 大堀 純子

訪問調査者 岩田、野澤、中村

I. 概要

1. 児童館等の概要について

(1) 施設規模 小型児童館

・3事業行っている

- ① NIKO NIKO 館 (児童館)
- ② NIKO NIKO クラブ (放課後児童健全育成事業)
- ③ 放課後子供教室



(2) 運営組織 管理運営：社会福祉法人 育和会

(3) 開館年月 平成 8 年 4 月 1 日

(4) 職員体制

NIKO NIKO 館・NIKO NIKO クラブ

館長 1 名、副館長 1 名、児童厚生員 2 名、
放課後支援員 6 名 (教育活動推進員 3 名、
教育活動サポーター 2 名、地域コーディネーター 1 名)



(5) 年間運営費 4,144 千円 (年度不明)

(6) 年間利用者数と、その内訳 (乳幼児・保護者、小学生、中学生、高校生、その他)

平成 29 年度 利用者数

合計：18,505 人 (乳幼児 3,276、保護者 2,543、小学生 12,681、中学生 0、高校生 5)

(7) 年間活動計画・報告等

① 児童館の運営方針

- ・児童館では、児童館活動、放課後児童健全育成事業、地域子ども教室推進事業を展開し、安心・安全な居場所の提供と遊びを通じた児童の健全育成を図る。

② 1年間の活動計画

平成 30 年度活動

花育キッズ、フラダンス・遊友団、土曜夜市、おもいで作り、NIKO 夕涼み会、高齢者サロン交流、防災トライアル、ミニミニ夕涼み会、3 施設合同避難訓練、林業まつり、くまくるまるしえ

③ 1年間の活動報告（まとめ）

【NIKO NIKO 館】

- ・地域カフェ（火・金）10:00～14:00
地域交流
- ・外部との協調 どんどこプロジェクト

【NIKO NIKO クラブ】

- ・学習、遊び、おやつを提供
- ・夏プラン（長期休暇）

【放課後子ども教室】

- ・クラフトコーナー / 毎月
- ・カルチャーレンジャー / 不定期
- ・パワーキッズ / 第1水曜日
- ・フラダンス / 第2・4水曜日
- ・こっとなコットン / 第1土曜日
- ・Cook ドウルドウル / 第2土曜日
- ・笛が滝 Day / 毎週水曜日
- ・おかしやさん / 毎週木曜日
- ・学習指導 / 毎週木曜日



調査に訪れたとき出会った駄菓子市。制限金額内で自由にお菓子を選べる



保護者や地元の人たちに好評な「地域カフェ」

(8) 自治体における児童館の位置づけ（児童館設置数、子ども育成計画等の内容、他）

- ・久万高原町で1館のみの児童館
- ・児童館では、児童館活動、放課後児童健全育成事業、地域子ども教室推進事業を展開し、安心・安全な居場所の提供と遊びを通じた児童の健全育成を図る。中高生、ひきこもり、不登校児童の利用を一層促進する。

2. 周辺環境

(1) 地域の状況（産業、地域特性、交通事情など）

- ・愛媛県中央部に位置し、仁淀川上流域にある山間の町。面積は県内市町村で最大。南東部は高知県と接している。人口約 8,000 人。主要産業は林業、農業となる。
- ・交通機関はバスのみ。利用者は自家用車利用。NIKO NIKO クラブは子どものみ利用の場合送迎あり。

(2) 児童館と地域住民や地域組織とのかかわり

- ・過疎地域のため職員不足に悩んでいる。働ける人が少なく運転手 1 人探すのにも苦労している。
- ・各校区とも幼稚園から中学まで 1 クラスしかないため、同じメンバー。学童保育を利用して他学区の友達づくり。
- ・先生、住民の目が十分子どもに行き届くが、かえって行き届きすぎて子どもにとってはプレッシャーとなっているかもしれない。

(3) 子どもの育成環境

- ・人の入れ替わりが少ない地域のため、世話をした子どもの子ども、またその子どもと世代を超えての家族ぐるみで児童館との付き合いがある。
- ・フレンドリーで素直、元気な子が多い。

(4) 地域の中で児童館以外に子どもたちが利用できる、施設・機関、活動等

- ・町営の町内交流館。芝生があり外で遊べる。

(5) その他、地域の特徴

- ・家族ぐるみでの付き合いのため、親の児童館への信頼度は強く、苦情は少ない。

Ⅱ. 訪問調査の結果

1. 日常的な利用者の過ごし方や職員のかかわりについて

(1) 乳幼児とその保護者の過ごし方と職員のかかわり

① 乳幼児とその保護者は、普段児童館でどのように過ごしていますか？

- ・乳幼児向けの施設「Happy House」、「つどいの広場」を利用している。



② 乳幼児とその保護者にかかわる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか。あるいは、どのような工夫をしていますか。

(ア) 心地よく過ごしてもらうために意識して行っていることは何ですか？

- ・くつろげるインテリアやオルゴール音楽などで、リラックスできる環境を創り出している。

(イ) 主体的にかかわってもらうために意識して行っていることは何ですか？

- ・自由に遊べる空間づくり。
- ・ルールというより自発的に気付かせる環境づくり。写真などを掲示している。(リピーターが多いので職員が注意しなくてもルールが守られている。)

(ウ) 保護者同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・地域カフェで親同士がリラックスして話せる環境を創っている。
- ・イベントへの参加提案 (イベントスケジュールは育和会だよりカレンダーで)

(エ) 施設や職員との関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・フロアに出た声掛け。
- ・子どもと遊びながら親にも声掛け。
- ・全体を見守られる職員を 1 人置くようにして、スタッフが下の子と遊び、親が上の子と遊べる時間を作れるようにしている。

(2) 子どもたち（小学生や中・高校生）の過ごし方と職員のかかわり

① 子どもたち（小学生や中・高校生）は普段、児童館でどのように過ごしていますか？

- ・小学校までは好きなことをして自由に過ごしている。
- ・児童館は小・中学校のボランティア活動の場にもなっている。

② 子どもたちとかかわる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか。あるいは、どのような工夫をしていますか。

(ア) 居場所づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・包容力のある先生（話を聞いてもらいやすい先生）を置いて、さみしくなったときに子どもの足が向きやすい、いつでも来られるような環境づくり。

(イ) 主体性を育むために意識して行っていることは何ですか？

- ・「何にもしないプログラム」
→子どもの自主性に任せる。
- ・憧れの対象になるような、そうなりたいと思わせる高校生などに来館してもらい、彼らと一緒に子どもが興味を持つプログラムを提供する。 Ex.ネイル屋さん
- ・子どもの得意分野を見つけ、自己肯定感を伸ばせるようにしている。
- ・居心地のよい空間づくり。きちんとした空間は気持ちよい。
→自主的に整理整頓。

(ウ) 子どもたち同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・子どものプライドを傷つけないようにしている。叱る場合は別室で1人で。

(エ) 施設や職員との関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・積極的な声掛け。

2. 児童館における「遊びのプログラム」についてお聞かせください。

(1) プログラムの捉え方

- ・児童館に来て、帰るまでの時間全てが遊びのプログラム。
- ・子どものテンションを感じて、それに応じて手助けしている。
- ・子どもが何かをしたくなる気持ち、自主性を大切にしたい。必要な時に必要な関わりを持つこと。

(2) 「遊びのプログラム」の内容

① 児童館で実施している「遊びのプログラム」を教えてください。

- ・各コーナーが遊びのプログラム。(手芸、読書、人形遊び、ボイスチェンジャー、外国に

ついて知ろう＝ロシアについてのコーナー、など)

② それぞれの「遊びのプログラム」のねらいと実施内容を教えてください。

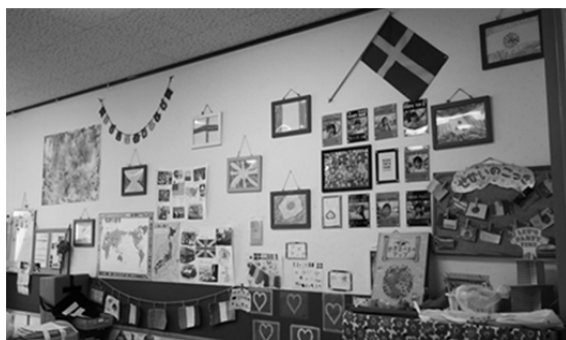
- ・子どもが興味を持ったコーナーに自分で行く
→主権は子どもが持つ。子どもの自主性が育つようにしている。

③ 「遊びのプログラム」の各展開過程で大事にしていること

① 「遊びのプログラム」を作成する際にどのような準備をし、どのようなことを大切にしますか。

- ・平成 30 年の年間プログラムを「外国について学ぶこと」にしたのはなぜ？
→認定子ども園になったことで、教育色を出したかった。地域、環境などの案も出されたが、平成 30 年度のテーマは「世界」になった。
- ・目安箱（年間テーマに沿って調べた事柄を投稿してもらい、優秀な投稿は館内に掲示したり共有したりする仕組み）を設置したのはなぜ？
→きれいに書く子、量産する子、簡単だけど内容が面白い子、などそれぞれの子どもの特性を見つけて褒めてあげられるようになり、褒めて子どものやる気を伸ばすことができる。

Ex.ロシアについて知っていることを紙に書いて箱に入れよう！



② 「遊びのプログラム」の実施中、特に配慮しているのはどのようなことですか？

- ・子どものモチベーションを保ち続けさせるのが大変。いかに興味を惹きつけ、楽しんで取り組ませられるか。やらせるのではなく、自発的に仕向ける。

④ 子どものとの関りにおいて大事にしていること

- ・子どもの気持ち。表情と現象から遠回しに核心に迫るようにしている。直接聞いてしまうと子どもの怒りの気持ちまで引き出してしまうことがあるから。
- ・理由を聞いてもどうにもならないこともあるので、子どもの気持ちに寄り添ってあげたい。

(5) 「遊びのプログラム」の評価（効果の検証・分析）方法

- ・評価は長い目で見てみないと分からない。その子どもが大人になったときに分かるのでは。
- ・アクティビティを計画して、それを終えたときに子どもの反応が予想したものと違ったときに、「〇〇すればよかった…」と感じる。
⇒〇〇とは？
→子どもが満足できていないのに次のプログラムに移ってしまい、子どもの興味、満足感を上手に引き出せなかったことへの反省。

3. その他意見

- ・複合施設なので金銭的にスタッフ同士協力できるのが強み。
- ・25年積み上げてきたもの（歴史・人のつながり）を失いたくないので、金銭的にはギリギリでも児童館経営に頑張る。
- ・当施設では館内にさまざまなプログラム（レゴ遊び、読書 etc.）が行える場所が作られていて、子どもたちは自由にそれらの場所を移動しながらさまざまなプログラムで遊びながら過ごす。つまりプログラムが「時間」によって分けられるのではなく、「場所」を移動することでいつでもさまざまなプログラムが体験できる。

III. 考察

久万高原 NIKO NIKO 館は、愛媛県内で一番面積は大きい、人口が一番少ない久万高原町の中心部に立地する町内で唯一の児童館である。児童館としては平成 8 年からの運営だが、戦後まもなくから続く保育園を母体として設置された児童館のため、3 世代にわたる地域との繋がりがある。同じ敷地内に認定保育園「久万保育園」、児童館「NIKO NIKO 館」、子育て支援センター「Happy House」が建てられ、全てが社会福祉法人育和会により運営されている。地域柄、自由来館で来る子どもたちは少ないかと思っていたが、実感としてはわりと来る印象。（自由来館ができる児童館の開館日数が限られていることで、来館者数にどう関係しているのかは気になるところである。）

規模としては小型児童館に分類されるが、「同一事業者が運営する子どもの育成に関わる複合施設」というのが大きな特色となっている。同じ運営者の施設が同一敷地内にあるため、施設の職員は人事異動があっても基本、同じ敷地内の別施設に移るだけなので、子どもにとっても保護者にとっても「自分のことを知っていて理解してくれている人がずっと見守ってくれている」と感じてもらえる。利用者側からの視点では、子育てに関するさまざまなニーズを 1 か所で享受できたり、隣の施設でも知った顔の職員が対応してくれる等の安心感が大きなメリットとなっている。また職員側の視点からも、同一敷地内の施設の職員同士が「同僚」のような関係となるので、子どもについての課題の共有化、催し事では同一テーマでイベントを開催したり、緊急時には人的支援を融通し合えたりなどのメリット

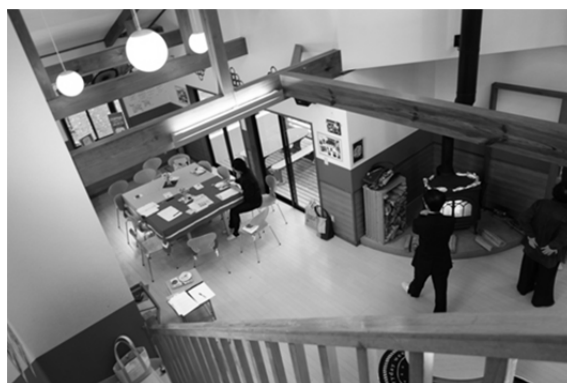
もある。

久万高原 NIKO NIKO 館の特筆すべき特徴として、建築設計の段階から「居心地の良い空間作り」が考えられ、その空間内を優しい印象のテキスタイル（布地）でインテリアをまとめていることが挙げられる。開放感のある高い天井、清潔で質素な印象の白木の床材や梁を使った内装、白い壁面に映えるカラフルなテキスタイルをあしらった家具やハンギングなどを使い、北欧的なインテリア空間を創り出している。この内装空間は子どもにとっても大人にとっても、「肩のこらないリラックスできる」雰囲気を生み出し、室内に入った利用者の心をほぐす環境となっている。NIKO NIKO 施設を運営する育和会の理念は「やさしくね、やさしくね、やさしいことは つよいこと」とのことであった。室内インテリアを見ると子ども大人問わず全ての利用者の心をやさしくほぐし、気持ちが解け合うような雰囲気が自然に生まれるように考えられており、NIKO NIKO 館の理念を反映した空間的を創り出している。

暇そうにしている職員を 1 人配置するようにしているとのこと。子どもや保護者が話しかけやすい雰囲気を作ることが目的である。職員が全員セカセカしていると子どもたちにも移ってしまう。しかもある程度、いろいろなところに目を配りながら、話しかけやすい雰囲気を醸し出せる経験のある職員が、暇そうにしている役割を担うことが多いそうだ。ソファ設置などの環境作りも含めて、子どもたちが落ち着いて過ごせるような工夫をしている。子どもたちの日常的な遊び生活を館としてとても重視されているのが伝わってくる。学童の子たちも自由来館の子にも、何かすることを強制せず、主体的に放課後を過ごしてもらうことが意識されている。例えば、暖炉があるのだが、その暖炉の近くには柵を用意していないのである。危険を自分で判断できるようになって欲しいとの理由からである。



寒い季節に威力を発揮する、薪ストーブ文字通り「暖かい児童館」を体現



開放的な室内の中心に薪ストーブを配し、来館者を温かく迎える空間をしつらえている。

子どもは「ただいまー」と帰ってきて、その日のテンションでやりたいことをやり始めるもの。それこそが遊びのプログラムであり、また次の日は違う遊びのプログラムが新た

に展開されていくのである。職員は、その遊びを支えながら手助けをしていくことが求められている。一方で子どもが一生懸命に遊んでいる時には介入しない。遊びを支えたり、遊びに介入しないというときの職員さんの感覚はどうかして表現することができないだろうか。暗黙知、経験知の部分を言語化していくことを真剣に考えねばならないと考えさせられた。

訪問時にはコミュニティ活動をされている代表の方々や、地域リーダーや類似児童育成組織の方等の NIKO NIKO 館を支えているの方々からお話を伺える機会を得た。集まった方たちは流入人口が少なく高齢化が進み、人口減少と若者世代の流出が著しい久万高原町において、いかに NIKO NIKO 館の存在が大切なのか、そして「地域の問題」として、どのように NIKO NIKO 館を支えてきているのかを語ってくださった。皆さんの言葉からは、この地域において育和会が永年にわたる保育園運営を通じて培ってきた信頼の深さと、現在の NIKO NIKO 館に繋がる育和会の一貫した児童に対する姿勢への信頼が、地元コミュニティに力強く根付いていることを実感した。伝統的に地域のつながりが強い久万高原町では、「子どもを健全に育てる場所」を担保することが、久万高原町を未来に向けて繋げてゆくことになるかと捉えられていた。コミュニティ全体が感じている町の将来についての危機感が「課題」として共有され、地域全体でその問題意識を共有しているからこそ、コミュニティが一体となって保育園、Happy House、NIKO NIKO 館を支えている関係が生まれ、また児童館もその期待に応える活動を続けているので、この様に強い結びつきができてきたのだと感じられた。



子どもも大人もリラックスする空間作り



施設内のあちこちに、子どもたちの作品をさりげなく並べて空間演出



壁面には利用者写真とともにオーナメント、天井にはテキスタイルをかけて優しい空間を演出

